



巻頭言

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安川, 禎亮 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9618 |

学校教育は大きな転換期をむかえ、コロナ禍を機にその流れは一気にスピードアップしました。学習環境の整備として、情報端末の整理と高速ネットワークの整備を充実させる「GIGAスクール構想」は、学校現場で実感として受容されてきました。オンライン授業が進んだ事により、登校しづらい子どもたちや、病気や障がいなどで外出出来なかった子どもたちが、学びの幅を広げることが出来たとも言えるでしょう。

文科省の「教育課題部会における審議のまとめ」（令和3年1月25日）に

○学習者の特性や進度、到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等を柔軟に提供し設定する。

○自らの学習を把握し、学習の進め方に工夫し、調整しながら粘り強く取り組む。

○興味、関心に応じ、課題の設定、子ども自身による情報の収集、整理、分析、まとめ、表現など、主体的な学習を最適にする。

すなわち「個別最適な学び」を、1人1台の端末といったICTによる新たなテクノロジーの出現により後押しする形となりました。子ども一人ひとりが自身の学習が最適となるように調整できる力をつけていこう、指導方法や学習環境の整備をチームで取り組む教育現場の在り方が求められているのです。

一方で、同一学年・学級をはじめ異学年や他校との学び合い、同一空間で互いに刺激し合う共通の時間、様々な場面で共通の体験を通じた学び合い等、従来の「協働的な学び」も改めて一斉授業の成果として取り上げられています。コロナ禍の休校中「学校に行きたい」「学校で学びたい」といった子どもたちの声により、学校での楽しさの共有がいかに大切なことであるかが、再認識されたのです。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還による充実感を提供するという視点で、日本の教育は進んでいくことになるでしょう。ハイブリッド型授業の推進、教育データの利活用、パフォーマンス評価の導入、STEAM教育の推進等、教育現場の充実を握るキーワードをとらえ、教師自身が新たな教育の道を探る必要性がますます高まってきました。

では、教師側から見て「学びの場」とは何でしょうか。子どもたちを導き、その成長にダイレクトに関わることの出来る教師という仕事は、大変やりがいのある仕事です。しかし、困難な課題は次々と現れ、常に学び続ける姿勢で立ち向かっていかなければなりません。

ところが、教師の学びの場は案外限られているのです。教育現場での経験を通しての学び、校内研究での学び、各自治体の教育センター等の行政研修、民間教育研究団体等での研究等に限定されています。しかも、長時間労働の合間をぬって、学びの場と時間を確保することは大変難しい状況にあります。

だからこそ、今後ますます「教職大学院」という教師の学びの場が大きな意義をもつこととなると思います。現場を離れて自己を見つめ直し、アップデートの機会を設ける場が必要になってくるからです。

教職大学院は、教育現場の諸課題に対応する実践力のある教員の養成を目指す大学院です。学校現場あるいは地域が、現在の教育に関わる教員に求める実践的能力、問題解決能力を身につけさせ、学校現場に生起する課題を解決へと導く力を養成することを目標としています。また、様々な経験や事例を持ち寄り、理論的な検討を加え、理論と実践を常に往還しながら学校全体で、さらには学校と地域で力を結集し、解決への道を探るといふ、より高度な研究を目指すという目標も持っています。すなわち、実践的な指導力を備え、新しい学校づくりの有力な一員となる新入教員の養成と、確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えた中核的中堅教員の養成という二つの目的を目指す教育研究組織といえるでしょう。

本研究紀要に、その研究の結実を見ることができます。特集「新教職大学院における実践報告—理論と実践の往還から—」では3本の論文、自由投稿では12本の論文が掲載されています。教員によるものもあれば、教員と現院生の共同研究もあります。また、教員と修了生による共同研究等、まさに学び続ける教師の育成の場となっています。

中でも、「教職大学院での学びを生かして～ストレートマスター編～」及び「教職大学院での学びを生かして～現職教員編～」では、ストレートマスターと現職教員の学びの体験の実例がまとめられており、教職大学院での学びが、その後いかに教育現場の実践に生かされていくか、その過程が明らかにされています。

ストレートマスターとして教職大学院で学んだ者3名と現職教員として教職大学院で学んだ者3名が

①教職大学院に進学した動機

②教職大学院で学んだこと

③現在の仕事に生かされていること

④これまでの学びを振り返って～大学院に行く前 大学院に行ってから～

についてまとめており、学びの深さが実体験を通して記述されています。

共通して述べられている事項は、教職大学院は「学びを得る場」であること、「俯瞰・省察の場」であること、「人とのつながり・ネットワークを広げる場」であることの3点です。さらに、現職教員院生と学部卒院生が共に学ぶことによって、お互いに刺激しあい、教師としての資質向上につながっていくことも教職大学院のメリットとしてあげられるでしょう。

「個別最適な教師の学び」も重要なキーワードです。教育に対してあくなき探究心を育てていくことが教職大学院の役割であり、修了後も「つながり合いながら 学び続ける教師」が育っています。

令和3年4月より、本教職大学院が大きく変化しました。全6コース、募集人数80名、担当大学教員は計209名（内訳：札幌71名、旭川68名、釧路54名、函館16名 令和3年4月1日現在）と、大所帯になっております。

学び、俯瞰・省察し、つながる場であるこの教職大学院は、新たな船出をしたばかりです。その発信の場の一つとしての本研究紀要が、何らかの形で皆様に活用され、本院へのご関心を喚起することが出来れば、幸いです。